

「ジャポニスム2018」続報 11

本号では、1月16日からパリ日本文化会館で開催されている「藤田 嗣治：生涯の作品（1886 - 1968）」展、および1月30日から2月2日まで開催された「生け花の総合イベント」について報告致します。

「ジャポニスム2018」は年が明けてもイベントが目白押しで、1月から2月にかけて各事業の関係者が多数来仏されました。その対応や一日に2～3カ所で開催される事業への掛け持ち参加など、落ち着いてニュースを執筆する余裕がないほどの現場の忙しさでした。

1

目次

1. 「藤田嗣治：生涯の作品（1886 - 1968）」展 2～6

1910年代に訪仏して描いた初期作品、パリで成功を収めた1920年代の「乳白色の裸婦」を描いた作品、戦前に中南米や中国を旅行して描いた作品、戦中に日本に戻って制作した戦争画、そして戦後再び渡仏しフランスに帰化して描いた円熟期の作品。各時期の傑作計36点を厳選し、藤田の画業を紹介する藤田没後50年を記念する回顧展です。昨年日本で開催された「没後50年 藤田嗣治」展では展示されなかった裸婦像やフランスで初公開される戦争画の大作2点を含む充実した展覧会となっています。

会期中に藤田を巡るシンポジウムと小栗康平監督による映画「Foujita」のフランス初上映会も開催しました。

2. 生け花の総合イベント 7～9

生け花5流派の家元・次期家元がパリ日本文化会館の地下3階大ホールに勢ぞろいして、その場で生け込みした大作を展示しました。また、いけばなインターナショナル・パリチャプター所属会員による作品群も、地下3階のホワイエと地上階エントランスホールに展示されました。その他、小ホールではシンポジウムが、レセプションホールではワークショップが開かれました。

① 「藤田嗣治：生涯の作品（1886 - 1968）」展

藤田嗣治が亡くなったのは1968年1月29日。その没後50年にあたる2018年1月29日（月）からエッソンヌ県ヴィリエ・ル・バークルの彼の最後のアトリエ「メゾン＝アトリエ・フジタ」で「フジタ、モンパルナスからヴィリエ・ル・バークルへ、画家の歷程」展が開催されました。

その後、パリ近郊やパリ市内で藤田の足跡を追う展覧会等がいくつか開かれましたが、昨年5月から開催されたマイヨール美術館における藤田展もその一つでした。同展も初期から晩年まで国内外の所蔵品を展示した充実した展覧会でしたが、回顧展と呼ぶには戦中の作品や、中南米を訪れた際に制作した作品など、一部の時期が欠けていました。

「ジャポニスム2018」の目玉企画の一つとして2019年1月16日から始まったパリ日本文化会館における「藤田嗣治：生涯の作品（1886 - 1968）」展（以下「藤田嗣治：生涯の作品」展）は、会場の規模の制約から展示数が36点と少ないながら、1914年から晩年までの各時代の文字通り代表作を集めた珠玉の回顧展となっています。15日に実施したプレス内覧会にはプレス関係者が67人来場し、既にフィガロ紙など主要紙に大きな記事が掲載されるなど、好評裡にスタートしました。15日夕刻に行われたレセプションには木寺駐仏日本大使ご夫妻をはじめ、パリ日本文化会館運営審議会の委員である、クリスチャン・ソテール元経済財政産業大臣ご夫妻、フランス学士院のロベール・ピット倫理・政治学アカデミー終身幹事、美術史家・美術評論家で、本展実行委員でもある高階秀爾西洋美術振興財団理事長、尾崎正明茨城県近代美術館館長、そして本展のコミッショナーである美術史家の林洋子氏、同ソフィー・クレブス氏（パリ市立近代美術館学芸員）らが参列しました。



藤田展のオープニング・レセプション



藤田展レセプションで挨拶する木寺駐仏日本大使と招待客

展覧会は ほぼ時代順に5つのセクションに展示されていますが、作風からみると、藤田の生涯の「起承転結」、4つに分類されます。「起」は藤田がパリに到着して間もないころの模索期。「承」はベル・エポック（良き時代）のパリで独自の画風を打ち立て画壇で注目された順風期、「転」は中国や中南米旅行を通じて色彩が変わり、その後第二次世界大戦に突入して日本が参戦、帰国を余儀なくされ、従軍画家として戦争画を描く、作風が前期とまったく変わる時期、そして「結」は再び米国経由でフランスに戻り、カトリックの洗礼を受けてフランスに帰化した色彩豊かな円熟期です。

まず入って正面の解説パネルの横に、藤田のトレードマークとなったおかつぱ頭に丸メガネ、ちょび髭、金のピアスといった風貌の藤田の「自画像」（1929年、東京国立近代美術館蔵）が展示されています。これは藤田が観客を迎える導入部となっています。

「起」：最初のセクションは1914年に制作された「巴里城門」（1914年、ポーラ美術館蔵）と題する小品ほかパリ周縁のうら寂しい風景を描いた絵が3点と今様ポップカルチャー的可愛い風貌の「少女」像（1920年、パリ市立近代美術館蔵）と「二人の女」（1918年、北海道立近代美術館蔵）が並び、藤田がまだパリの生活になじみ切っていない頃の作品が展示されています。この時代はルソーやモジリアニなどの作品を意識した画風となっています。

「承」：2番目のセクションは1920年代の「乳白色の裸婦」像のオンパレードとなっています。なかでも注目されるのは、傷みがひどく、昨年日本で開催された「没後50年 藤田

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpfc.jp/mcjp/member/news.html>

嗣治」展にも出品されなかった「ジュイ布のある裸婦」像（1922年、パリ市立近代美術館蔵）や背景にケシの花模様の「ジュイ布」を綿密に描いた「タピスリーの裸婦」像（1923年、京都国立近代美術館蔵）、藤田が初めて裸婦の群像表現を試みたサロン・ドートンヌ又出品作「五人の裸婦」像（1923年、東京国立近代美術館蔵）、当時一緒に暮らしていたユキを中心に仮面舞踏会で出番を待つ女性たちが描かれている「舞踏会の前」（1925年、大原美術館蔵）など大作が並び、ほかに藤田のお気に入り外国旅行中にも携行していたといわれる室内静物画2点と「アトリエの自画像」（1926年、リヨン美術館蔵）、および友人の女性を描いた2点の肖像画が目を引きまします。

4

「転」：続く壁を隔てた3番目のセクションには1930年代に中南米を恋人のマドレーヌとともに旅行し、ブラジルで描いた「町芸人」（1932年、平野政吉美術財団蔵）や「室内の女二人」（1932年、平野政吉美術財団蔵）、中国や日本国内を旅行した時に制作した「北平の力士」（注：北平は中華民国時代の北京の呼称）（1935年、平野政吉美術財団蔵）、「孫」（1938年、沖縄県立博物館・美術館蔵）、そして「メキシコにおけるドレーヌ」（1934年、京都国立近代美術館蔵）が並んでします。

4番目のセクションには戦時中に描かれた作品3点が展示されています。第二次世界大戦勃発後にドイツ軍が迫るパリで描いた14匹の猫の様々な姿態を描いた「争闘(猫)」（1940年、東京国立近代美術館蔵）、アラスカ州アリューシャン列島にあるアッツ島（熱田島）で1943年5月に日本軍が米軍の攻撃によって「玉砕」した場面を描く「アッツ島玉砕」（1943年、東京国立近代美術館蔵、「国民総力決選美術」展出品作）、そして藤田最後の戦争画で、サイパン島の「玉砕」を描いた陸軍美術展出品作「サイパン島同胞臣節を全うす」（1945年、東京国立近代美術館蔵）の迫力ある大作3点です。

「結」：その後は戦後の作品が並びます。まず漆黒の背景に眠る裸婦とその周囲に着衣の猫や鼻、犬、狐、兎、鼠等が描かれた「私の夢」（1947年、新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵）と17世紀の詩人ラ・フォンテーヌの『寓話』の中の「烏と狐」の一場面を描いた「ラ・フォンテーヌ頌」（1949年、ポーラ美術館蔵）が展示され、そして最後のコーナーは、戦後パリに戻る途中経由したニューヨークで制作された、店内で便箋を前にして物思いにふける女性を描いた「カフェ」（1949年、ポンピドゥー・センター蔵）から始まり、パリで描いた「フルール河岸 ノートル＝ダム大聖堂」（1950年、ポンピドゥー・センター蔵）、そして聖母マリアの左右に修道士姿の藤田と修道女姿の君代夫人が描かれた「礼拝」（1962-63年、パリ市立近代美術館蔵）、骨董好きの藤田ならではの「すぐ戻ります（蚤の市）」（1956年、パリ市立近代美術館蔵）、パリジェンヌをテーマとした第7回「時代の証人の画家たち」展への出品作「ピストロ」（1958年、カルナヴァレ美術館蔵）、そして最後は小さな正方形の画面48枚にフランスの名所や食品その他特産物を子どもとともに描いた「フランスの富」（1960-61年、パリ市立近代美術館蔵）という作品で展示が終わります。（注記：日本語作品情報は「没後50年 藤田嗣治」展カタログによる）

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpfc.jp/mcjp/member/news.html>

その間、ところどころに藤田の製作したフィルムやカトリックの洗礼を受けた際のモニター映像、その他各時代の写真等が説明文とともに掲示され、じっくりと鑑賞するのに適した空間構成となっています。

この「藤田」展には、3月9日（土）まで（日、月、祝日休館）に36,389人が入場しました。会期後半になって平日でも一日千人前後の来場者を数え、入場制限をかけるほどに盛況となっています。本展は3月16日（土）まで開催されますので来場者が4万人に達するのは確実とみられます。



パリ日本文化会館前で藤田展の開場を待つ人々（2019年2月8日12時）

日本から来られる要人も「藤田嗣治：生涯の作品」展を訪れるケースが増えています。衆議院議員萩生田光一総理特使をはじめ、衆議院議員山田賢司外務大臣政務官、小説家の林真理子さんや桐野夏生さん、他の用事で来館された生け花の家元の方々や映画関係者が大勢鑑賞されて帰国されました。

団体でのビジットツアーの申し込みも多数あり、2月19日にはパリのバイリンガルの中学校の父母のグループ30名が「藤田嗣治：生涯の作品」展を鑑賞したほか、3月12日にはフランス国会議員の仏日友好グループ10名ほどが来館することになっています。

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

今回のパリ日本文化会館の「藤田嗣治：生涯の作品」展を見た人たちからは「すばらしい」の賛辞を連発され、画家藤田を再評価したという声が多く聞かれます。

2月9日（土）午後、パリ日本文化会館で「ジャポニスム 2018」事業の一環として日仏文化交流に貢献した人物をテーマとした日仏高校生によるプレゼンテーション発表会が開催されましたが、参加したフランス・コルマルのバルトルディ高校のグループが「藤田嗣治」をテーマに選びました。その発表の中で、藤田は戦争画を通じて平和を訴えたかったと述べていましたが、今回出品された「アツツ島玉砕」と「サイパン島同胞臣節を全うす」を見てそのような感想を述べたフランス人が少なからずいました。まさに、1月15日（火）に行われた藤田を巡るシンポジウムで、西洋美術振興財団の高階秀爾理事長（大原美術館館長）が述べていたようにこの2点は戦争で亡くなった人々への「鎮魂の絵」だという言葉が裏付けるような反応でした。

なお、1月18日（金）には小栗康平監督が4年前に完成させた映画「Foujita」がパリ日本文化会館で上映されました。諸事情でフランスでの公開が遅れ、今回初上映されたものです。前半と後半がはっきりと分かれた映画で、前半は藤田がパリに到着してからベル・エポックの時代をしたたかに生きる藤田の様子を、後半は戦争で日本に帰国した時期の様子を、対照的に描いています。伝記を史実に忠実に描くのではなく、藤田の生涯を題材としてあくまでも映像美を追求したという画面は、非常に美しいものでした。ただ、藤田のことをよく知りたいと思ってみた観衆には、若干物足りなく映ったようです。

② 生け花の総合イベント

1月30日（水）から2月2日（土）までの4日間、パリ日本文化会館の地下3階大ホールで日本の生け花5流派の家元・次期家元による生け花の大展覧会が、地上階および地下3階ホワイエではいけばなインターナショナル・パリチャプターの会員たちによる生け花展示が同時開催されました。

日本いけばな芸術協会といけばなインターナショナル・パリチャプター、国際交流基金、およびパリ日本文化会館が共催した一大生け花イベントで、池坊次期家元の池坊専好さん、小原流家元の小原宏貴さん、草月流家元の勅使河原茜さん、一葉式いけばな家元の粕谷尚弘さん、未生流家元の肥原慶甫さんの5人が一堂に会して花を生けるのは日本でもめったに見られないことで、生け込みの際には背後にプレッシャーを感じながら制作したと皆様が述べていました。しかし、展示し終わると皆さんお互いの作品を鑑賞し合うなど、和気あいあいと親交を深められたようでした。

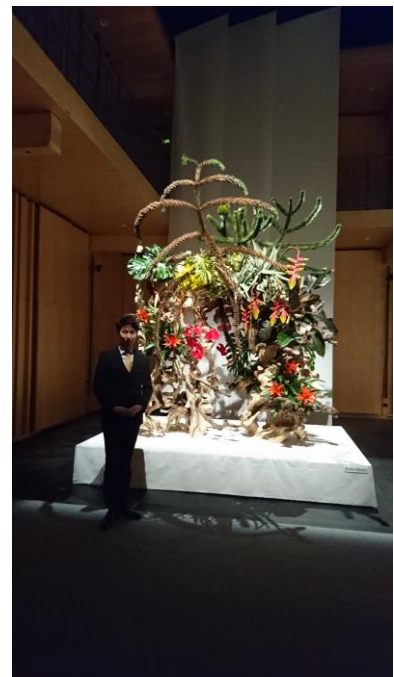
作品はいずれも力作、傑作揃いでしたが、7m近い巨大オブジェから豪快、勇壮、典雅、流麗、独創的なものまで、それぞれの流派の渾身の作品が大ホールに展示されました。この4日間は会館中が美しい花のオブジェで満ちあふれ、パリ日本文化会館が花々のほのかな芳しい香りで包まれました。



一葉式いけばな家元の作品



草月流家元の作品



小原流家元の作品



未生流家元の作品



池坊次期家元の作品



エッフェル塔を背景に記念撮影

最終日の2月2日に開催されたシンポジウムには日本いけばな芸術協会の宇田川仁(理翁)常務理事(古流理恩会家元)の司会のもと、5流派の家元・次期家元たちがそれぞれの流派の成り立ちと理念等を披露されました。



シンポジウムの様子(左から宇田川常務理事、未生流家元、草月流家元、小原流家元、一葉式いけばな家元、池坊次期家元)

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpfc.jp/mcjp/member/news.html>

そして5階のレセプションホールでは毎日家元・次期家元による稀有で贅沢なワークショップが開かれ、生け花の理論と実践の授業が開催されました。



レセプションホールで行われたワークショップの様子（講師は池坊専好さん）

最終日には1,400人超の来場者があるなど、生け花のワークショップへの参加者や「藤田嗣治：生涯の作品」展の入場者やその他を合わせると3,000人を超える来館者があり、パリ日本文化会館始めて以来の記録的な一日当り入場者数となりました。そして、生け花展示4日間の総入場者数は3,671人に達しました。



地上階エントランスホールでの生け花展示を鑑賞する来場者たち

以上